

森有礼の学事巡視

——その行程をめぐって——

はじめに

明治十年代後半から明治二十年代にかけての森有礼文相時代、文部省は全国に学事巡視を実施し、各地の実態を調査すると共に、諸学校令並びにそれに関する細則などについて示論し、国民国家の形成を見据えて教育普及の啓蒙を図ろうとした。その一環として、森有礼は文部省御用掛時代から文部大臣時代の五年足らずの間に、十日以上に及ぶ長期学事巡視を六回実施している。そして、巡視の途次各地で知事・郡区長・学務委員・戸長・校長・教員等を集めて演説を行っており、それらの多くは『新修森有礼全集』^③第二卷「教育二（演説）」に収録されている。（以下『新修森有礼全集』を『新修』、『森有礼全集』を『全集』と略して記す）先行研究では、それぞれの研究テーマに沿って、この演説内容から森の文教理念及び方針等を取り出す形で研究がなされているが、表題のように、その足跡そのものを詳細に明らかにしようとする研究は、管見では見当たらない。

本稿は、森の長期学事巡視の行程を詳細に明らかにすることを第一の目的とし、更に、学事巡視に際して森が意図したものは何か、巡視の過程でどのような出来事が生じていたのかを、具体的に探ろうとするものである。そこで先ず、森の学事巡視構想について概略を述べた上で、長期学事巡視の行程を検討することとする。

一・森有礼の学事巡視構想

森は、一八八五年（明治十八）一二月文部大臣就任の直後から省内の大改局に取組み、大人事異動を行って視学部を発足させ「府県ヲ五部二分チテ各々一部ヲ担任シ、其学事ヲ視察シテ文部大臣ニ具申スルコトヲ掌ラシメ、視学部ニ属官若干人ヲ附シ事務ニ服セシム」^⑤とし、翌年三月九日各地方部と担当視学官を決めた。この学事巡視は森文政期に始まったことではなく、明治六年から十八年までに五十八回実施されている。この内明治一四年から一七年にかけての巡視は、自由民権運動への政府の対策の一環として、教育界での自由民権運動の実態把握を目的の一つとするものであった。^⑦森はそうした政治的な対応とは一線を画し、学事巡視をより制度的に強化し、組織的に取り組むことによって全国レベルでの国民への啓蒙と教育の普及促進を図ろうとしたのである。その理念について見るならば、『文部省第十三年報（明治十八年分）』に記載されている次の史料が最も端的にそれを表していると言えるだろう。^⑧

教育ノ期スル所遠クシテ且ツ広シ、其好結果ヲ収メント欲セハ徒ニ法令条規ヲ布シテ以テ足レリトセス、必ヤ施設ノ実況ヲ督察シ其利害得喪ヲ考へ、以テ着実ニ其歩ヲ進メサルヘカラス、是視学ノ学政上欠クヘカサル所以ナリ

この史料から、森は、教育行政の根本に学事巡視を置いていたと言えるのである。

鎌田佳子

それでは次に、視学官の任務について考えてみたい。鈴木博雄の「文部省視学官の学事視察に関する一考察―初代文部省視学官中川元の巡視日記を手掛かりとして―」によれば、①諸学校令並びにそれに関する細則などについての示諭協議、②地方教育会の結成を奨励、③各担当部内の学事巡視、の三点をその任務として挙げている。また、第一地方担当野村視学官は、「小学校ノ完全ナルトハ如何ナルモノヲ指スカトナレハ、経済ヲ上手ニシテ児童ノ教育ハ充分行届クヲ謂フナリ、即一口ニ之ヲ言ハハ、費用ハ少クシテ教育ノ行届クヲ謂フナリ・・・其方トハ何ソ、一ハ教員其人ヲ得ルニ在リ」と語っている。学校経済に関する発言は、森が学事巡視の演説の中で述べていることと全く主旨が一致しており、文部官僚を通して森の文教思想が各地に伝えられていったことがわかる。

しかし、森文政期の学事巡視は、視学官と文部大臣だけで実施したものではない。『文部省第十四年報（明治十九年分）』～『文部省第十六年報（明治二十一年分）』の「地方視学」には、高等師範学校長には各府県の尋常師範学校への、高等中学校長や教諭等には各地方部の尋常中学校及び小学校等への巡視を命じていることが記されている。以上のことから、森をトップとして、視学官、更に現場の教員と、ピラミッド型の構想の上に学事巡視が実施されていったものと考察する。

それでは次節から、実際に具体的な森の巡視行程について見ていく事にしよう。

二．近畿・四国・中国地方への学事巡視

森が文部省御用掛時代に実施した近畿・四国・中国地方への学事巡視について、その行程を図―1に表した。本節では、この図の矢印に沿っ

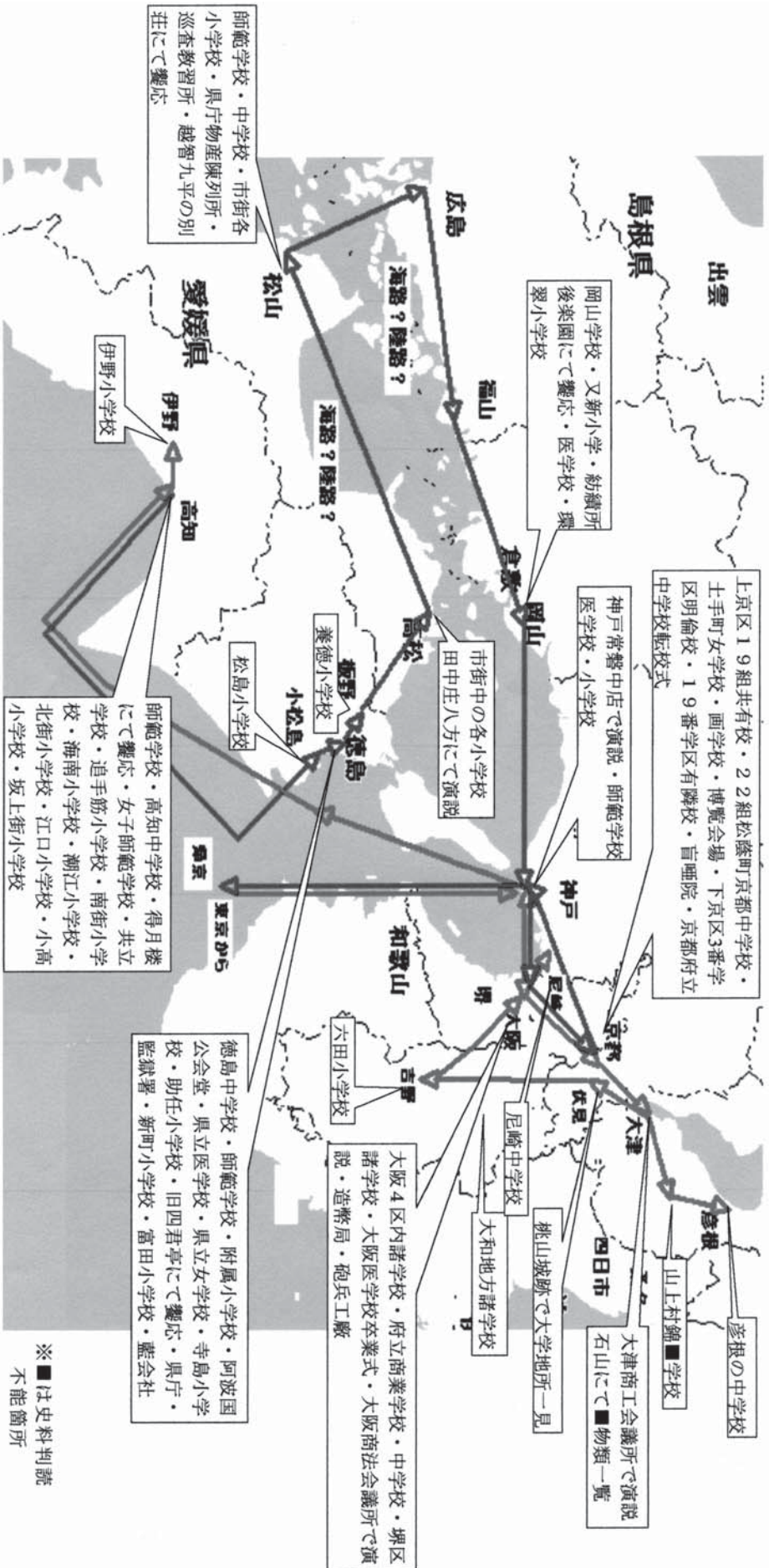
て順次内容の検討を行うことにする。

森に随行したのは文部権少書記官吉村寅太郎・同御用掛青木保・属官二名で、明治一八年四月八日東京を発つて神戸に入港し、四月一二日大阪入りしている。直ちに大阪四区内及び堺区内の諸学校を巡視、その後尼崎中学校を巡視して大阪に戻り、四月一九日大阪商法会議所に於て演説をなし、京都に向かっている。京都では四日間滞在して各学校・盲啞院等を巡視後、滋賀県へ入り四月二三日大津商工会議所に於て演説、彦根まで足を伸ばし、引き返して伏見桃山城跡で大学地所を一見して四月二六日大和地方に向かっている。大和地方に於ける巡視行程は明らかではないが、朝日新聞の明治一八年五月三日号に「吉野郡六田小学校に到られしとき、同校在勤の助教筏谷久藏氏の授業に勉め教育に熱心なる事を見聞せられ、金若干円を贈りて感賞の意を表せられしよし」とあることから、吉野まで行っていることは明白である。大和地方諸学校の巡視を終えた森は、五月一日再度大阪に入り、造幣局・砲兵工廠等を訪れ、その後兵庫県へ向かい、五月六日神戸常磐中店で教育並びに商業上に関する演説をなし、翌七日市内の学事巡視を行って、午後八時出航の出雲丸にて高知に向かい出発している。

五月八日夜に高知孕湯に着した森は、約一週間高知県に滞在している。ここでの特筆すべき出来事については後に述べることにするが、図―1に示した通り精力的な巡視を行っている。そして、五月一五日出雲丸にて出航し、徳島県勝浦郡小松島浦村に到着して、これより徳島、愛媛の巡視が始まるのである。徳島でも高知同様に各学校を巡視し、他に公会堂・県庁・監獄署等も巡覧している。その後高松に向かうが、その途中、板野郡奥野村養徳小学校を巡視している。このように、次の目的地に向かう途次、沿道の小学校へ立ち寄り巡視をしながら行程を進めるといいう事が、森の長期学事巡視では各地で見受けられるのである。五月二〇日

【図一】 森有礼の学事巡視行程図（1）
近畿・四国・中国地方

1885年（明治18）4月8日～6月9日



参考文献 読売新聞：明治18年4月10日号 日本立憲政新聞：明治18年4月10号～4月18日号、5月3日号～5月8日号、6月4日号、6月5日号 朝日新聞：明治18年4月21日号～4月22日号、5月1日号～5月3日号、6月7日号、6月8日号 日出新聞：明治18年4月21日号～4月28日号 中外電報：明治18年4月26日号 土陽新聞：明治18年5月10日号～5月16日号 普通新聞：明治18年5月18日号～21日号 海南新聞：明治18年5月24日号～5月27日号 山陽新報：明治18年6月1日号、6月2日号 朝野新聞：明治18年6月10日号

に高松に着し、直ちに市街の各小学校を巡視し、五月二五日には松山で師範学校・中学校・各小学校等を巡視、二六日に広島県へ向け出発している。

広島県内での動きについては、管見において史料が全くなく不明である。ただ、山陽新報の明治一八年五月三〇日号に「備後福山より本日来岡せらる、由」とあるから、広島県に滞在していたことは事実である。実際には、岡山県には一日遅れて五月三一日に到着した。岡山の学校を巡視後、讃岐丸にて神戸に着いたのは六月三日である。翌日大阪に入り、七日京都府立中学校転校式に出席して、午後神戸に向かい、翌八日新東京丸にて帰京の途につき、九日午後四時、六四日間に及ぶ学事巡視を終えて帰京した。

それではここで、本節の学事巡視に於ける特筆すべき事項を、いくつか取り上げてみよう。この時の巡視では、文部省御用掛として次の㉞㉟ウの任務を負っていたと思われる。

㉞各県の教育費削減の実施方法の調査。並びに学務委員の給料を廃止するかどうか現場の意見調査。これに付いては、四月十二日神戸から文部卿に送った電報の中で「兵庫縣ハ教育ニ付大イニ経済ヲ立費用ヲ減スルノ見込ミアリ、但学務委員給料ハ決シテ廃止スヘカラストセリ、右ノ旨内務大蔵兩卿へ御通知アリタシ」と報告している。他にも大阪・京都・滋賀についても同様の電文が打電されており、この件については、相当意識しての調査であったことがわかる。

㉟文部省で有用な人物調査。これに付いては、五月十六日付徳島から出した文部卿大木喬任宛書簡に「教育家と稱するに見るべき之人物未タ多く見當り不申甚た遺憾之至御座候、但其中兵庫縣学務課長久保某ハ普通教育上具眼之有力者と見受申候二付、一應東京へ御呼出親しく其意見を御聞取相成候ハ、御便利不少」とあり、文部省で採用する有用な人物

を調査していることがわかる。

㊲地方政治情勢と教育との関わりについての調査。前掲書簡には更に「高知にて板垣片岡其外自由黨トヤラノ中重立候人物緩々面會仕候處、政黨心を教育上ニ及ボスコト不可ナリト申迄ニは充分承知為致置候、彼等專握之共立学校之義ニ付而も前途困苦且右之理由ニより何トカ善キ工夫付ケ呉候様ニト内情依頼之次第有之ニ付一寸御含まで申添候」とある。政治と教育の分離は森の一貫した主張でもあるが、この巡視では、実際に民権家たちと面會することでその実現を図るという任務も帯びていたと考えられよう。但し、他所に於いて巡視の途次自由民権派と面會した記述は、管見に於いて見当たらない。

またこの巡視では、事前の通達なしに飛び込み訪問をすることによって、より現場の実情を把握しようとして試みていたようである。このことについて、大阪四区の状態を見てみよう。明治十八年四月十二日付で大阪府東区役所学務掛から、管内の四学校及び第九学区の学務委員にあてた公文書が残存している¹⁵。これによれば、「文部省御用掛参事院議官森有礼、明十三日より突然巡視可相成候二付、其心得可有之区长ノ命ニヨリ此段及御通達候也」とあり、しかも欄外に「大至急即刻夫々通知ノ事」と書き込まれており、現場の慌て振りが窺えよう。森の飛び込み訪問は、現場にとつて本当に予期せぬ出来事であつたらしく、翌日も同様の趣旨の通達が出されている。これを受け各学校では、準備は出来ないまでも通達の如く有る程度の事前心得は出来た事になり、実態を観察する上で予告なしの巡視が有効策であるという森の意図は、多少空振りしていたと思われる。因みに、九州地方に於ける巡視中にも、「突然適宜に臨場するによしなり」の記事があり、森の意志としてはそうした調査のスタイルは一貫していたようである。

それでは次に、最も長期の巡視であつた九州地方について見ていくこ

とにするが、実は、九州地方に行く前に山口・石川への巡視が計画され、明治一九年六月二四日付けで公文書が出されている。¹⁷しかし、七月一三日森の父有恕死去の為中止となり、辻新次文部次官が代行している。

三 九州地方への学事巡視

本節では、文部大臣時代最初の長期学事巡視である九州地方について、その行程を図12に表した。この巡視については、『全集』第一巻「森有禮年譜」に大まかな行程の記述があるものの、不完全なものであるため、各訪問先の地方新聞を中心に資料種類からの情報を加え、より精密な行程図を作成した。この図の矢印に沿って森の足跡を追ってみることにしよう。

明治一九年一月二五日、森は秘書官木場貞長・文部属弘中格・同飯澤耿介・執事武島定二郎を伴って横浜を出航、九州地方の巡視に先立って京都に立ち寄り、一月二七日から二九日にかけて第三高等中学校の用地検分を行っている。山城国葛野郡谷口村、愛宕郡紫竹大門村、同郡吉田村の三ヶ村を実地検分し、吉田村を可としている。¹⁸森は、翌年北陸・近畿地方（第三地方部）への巡視の際、再度この地を訪れ建設工事を一覧し、主任に指示を与えている。¹⁹この用地に関して、明治二一年四月二六日付で地所受領の報告書「京都府下愛宕郡吉田村地内官民有地五万式百八拾九坪壹合七勺八当省所轄第三高等中学校建築敷地トシテ必要ニ付当省へ領収シ・・」²⁰が文部大臣森有礼から総理大臣伊藤博文へ提出されている。文末欄外に「五月一日総理大臣差免了」の書き込みがなされている。この用地に、明治二十二年第三高等中学校が創建され京都大学の前身となったのである。

それでは、九州地方の順路を追ってみることにする。明治二〇年一月

一日森一行は長崎に着港し、当日師範学校生徒の体操を一覧。翌日武雄に入ったが学校が休みの為滞在。その後武雄小学校を巡視して有田へ入り、高等・尋常各小学校巡視している。この時有田小学校に於て、小学校通学貧生徒の学識ある者一名に、全課卒業迄の学費を寄付することを約束している。²¹ちなみに森は、同年七月「森有礼寄付金」を設立した。金三千円を五カ年賦にて五箇の高等中学校の品行方正で学力優秀且つ貧困生徒の為に文部省へ寄付するとし、文部省でその細則が決められた。これは、有田小学校での約束が端を発していると考えられる。

さて巡視行程の検討に戻ることしよう。森は有田から武雄に戻り、一月六日佐賀に到着。予定では佐賀市街のみの巡視であったが、郡長の申請により養父郡觀光小学校と基肄郡田代小学校の巡視が行われた。そして、一月九日には太宰府に泊まり、翌日福岡入りしている。福岡の巡視を終えて久留米、山鹿を経て一月一五日熊本に到着し、一九日に出発するまで、図12に示す通り精力的な巡視を行っているのである。そして、宇土から三角港へ出て船で鹿児島へ向かうが、途中時化のため長島の加世堂に仮宿し、阿久根に着後、更に船で川内に入り人力車に乗り換え、一月二三日鹿児島に到着している。鹿児島は森の故郷であり、その上大臣として帰郷したのであるから、かなりの動きがあったと思われるのだが、宿泊先が易居町本田省三方であることと、二五日に鹿児島で演説をしていること等が判明しているほか、巡視学校名等は管見において不明である。二八日に鹿児島発小蒸気船で加治木へ向かい一泊して、翌日都城で更に一泊、三〇日宮崎に到着している。二月二日鹿児島に帰着するまでの間、宮崎に於ての巡視先も不明である。鹿児島には四日間で滞在し長崎に向かう筈であったが、予定を変更して駿河丸にて沖繩に向かっている。これについては、熊本新聞明治二〇年二月一日号の「目下滞在中なる相良沖繩県尋常師範学校長が、是非今回の巡回を幸ひ沖繩

〔図-2〕 森有礼の学事巡視行程図（Ⅱ）


九州地方（第5地方部）

1886年（明治19）12月25日～1887年（明治20）3月4日




参考文献 熊本新聞：明治20年1月4日号、1月13日号～2月1日号、2月8日号、2月22日号～2月24日号、3月12日号 鎮西日報：明治20年1月7日号、2月13日号～2月20日号 佐賀新聞：明治20年1月7日号～1月14日号、2月19日号 防長新聞明治20年3月3日号 『教育報知』第55号（東京教育社、明治20年2月19日） 『東町郷土史』『年表』（東町郷土史編さん委員会、平成4年3月31日） 『大分県共立教育会雑誌』第27号（大分県共立教育会、明治20年4月26日）

県にも出張ありてその学事の有様を一覽せられたし、と請求せられたりといふ」の記事から、尋常師範学校長の依頼により予定外の沖繩巡視が実施されたことがわかる。二月六日沖繩に到着した森は、尋常師範学校・中学校・小学校等を巡視し、古波蔵村練兵場にて激しい降雨の中、各学在校生の運動会を視察。その後、那覇の本願寺出張所に教育関係者を召集して演説し、この中で女子教育の重要性について述べている。沖繩の尋常小学校女子生徒数は、明治一九年度僅か六七名であったのが、翌年度には五七五名に激増していることから、森の演説が沖繩の女子教育の発展に少なからず影響を与えたものと考えられるのである。

さて、二月九日沖繩を出航した森は、一端鹿児島に着し、それより安治川丸にて長崎に向かい、同一三日入崎している。一六日午後時津に向かい出発するまでの二日半の間に、1-2に示す通り多くの学校を巡視し、時津を経て大村、諫早、島原に投宿しながら、一九日熊本百貫石へ入港した。熊本では師範学校教員講習会の模様を一覽後、教諭・教員を集め演説をして、陸路大分に向かい、途中阿蘇郡坂梨村に投宿して坂梨小学校を巡視、二四日に大分に着している。同日尋常師範学校を巡視、同校で演説をして小倉に向かい、二八日小倉から下関に入って商業学校を巡視している。これは、前年山口・石川への巡視計画が森の父有恕死去により中止となったので、今回立ち寄ったものであろう。こうして七〇日間に及ぶ九州地方への巡視を終え、三月一日薩摩丸にて出航、三月四日帰京している。

森は、九州地方各地で県内・郡内・校内の学事報告を、知事・郡区長・校長からさせているが、これは他の地方に於ても同様に行われている。以上、九州地方への学事巡視について行程の検討を行った。

四・福島・宮城地方及び北陸・近畿地方への学事巡視

明治二〇年六月一六日から六月二六日にかけて実施された福島・宮城地方への学事巡視については、公文書では奥羽六県と北海道になつてゐるが、公務の都合により福島と宮城のみとなつた。この巡視には秘書官木場貞長が随行し、彼の命により木村匡属官が「文部大臣学事巡視随私記」を記し、それが『大日本教育会雑誌』に掲載された。これを基に行程図を1-3に表した。詳細は前掲「文部大臣学事巡視随私記」にあるので本稿では省略するが、第二高等中学校用地検分に関してのみ述べておくことにする。

明治二〇年六月一八日仙台に到着した森は、翌一九日にかけて第二高等中学校建設候補地である長町村字根岸・山田原村字臺ノ原・花京院通・片平町を視察している。この内片平町が選定され、前掲第三高等中学校と同様の報告書が、明治二十一年七月三十日付で森から総理大臣黒田清隆へ提出されており、文末欄外に「九月一二日総理大臣差免了」の書き込みがなされている。森は、次節で扱う奥羽地方への学事巡視の際、再度片平町を訪れ第二高等中学校建築現場を視察している。また、後述の北陸・近畿地方への学事巡視に於ても、金沢で第四高等中学校の用地検分を行っている。森は大臣就任当初、全国に五ヶ所の大学校とこれを総轄する一の大学を東京に設ける構想を持ち、大学条例として内閣に上程したものの、五大学校に関する条目は財政上の理由で却下された。森自ら高等中学校用地検分を実施していること、第三高等中学校の例にもあるように広大な用地を取得していること等から、将来これらの高等中学校を五大学校に昇格させる構想だったと推察される。

次に、明治二〇年一〇月一八日から一月三〇日にかけて実施された北陸・近畿地方への学事巡視についてであるが、この時も木村匡属官が

〔図-4〕 森有礼の学事巡視行程図 (IV)

北陸・近畿地方 (第3地方部)

1887年 (明治20) 10月19日~11月30日

森有礼の学事巡視



参考文献 木村匡「文部大臣学事巡視随日記」(『新修森有礼全集』第2巻 文泉堂、1997年)『新修森有礼全集』第2巻「教育二(演説)」456頁 朝日新聞:明治20年11月18日号、11月19日号、11月22日号 金城新報:明治20年11月23日号~29日号『教育時論』第94号(開発社、明治20年11月25日号)、第96号 明治20年12月25日号 伊勢新聞:明治20年11月29日号~12月3日号

六三

して、午後医学校を巡視、同校に区内各小学校教員を集めて教授方につき演説をしている。二五日午前須に至り、小学校生徒二四〇余名の隊列運動を一覧して大満足した森は、生徒一同へ賞詞に加え賞与二〇円を贈っている。同日午前須を出て桑名に着し、翌二六日桑名郡高崎小学校を一覧、その後四日市に於て三重郡第一高等小学校を視察し、津に到着。二七日市街の各学校を巡視し、三重県会議事堂で演説。二八日松坂を経て午後山田へ着し、高等小学校巡視後、伊勢神宮を参拝して所謂「伊勢神宮不敬事件」が起こった。翌二九日津水上警察御用船にて二見ヶ浦から四日市へ向かい、四日市で名古屋丸に乗船して四〇日間の巡視旅行を終え、三〇日帰京して

る。
以上、福島・宮城地方及び北陸・近畿地方への学事巡視について、補足説明を行った。次節では、最後の長期学事巡視となった奥羽地方について見てみよう。

五、奥羽地方への学事巡視

明治二十一年一〇月四日から一月六日まで、三四日間をかけて奥羽地方を一周する形で実施されたこの巡視には、東京教育社社長日下部三之介が随行し、その随行記「文部大臣巡視紀事」が『教育報知』に四回連載された^③。日下部は、当初全行程随行する予定であったが、途中一〇月一三日盛岡までで帰京している。また『新修』は、当時秘書官として随行した中川元の「奥羽方面随行記録」^④を収録している。しかしこれは、手帳にメモ程度に巡視地が書かれているのみで、青森・秋田・山形については巡視学校名等は不明である。そこで本稿では、各訪問先の地方新聞を中心に資料類からの情報を前掲史料に加え、**図-5**を作成した。この図の矢印に沿って行程をめぐってみることにする。なお、一〇月一三日までは日下部の前掲書に詳細な記録があるので、本稿では省くこととする。

明治二十一年一〇月一四日青森県に向け盛岡を出発した森一行は、北岩手郡沼宮内駅に着し、北岩手高等小学校及び沼宮内尋常小学校を巡視して一戸に投宿。翌日、三戸小学校を視察して八戸に泊まり、一六日は七戸泊、一七日は青森に向かう途中野辺地小学校を巡視、青森入りして議員十数名と面談している。一八日尋常中学校・尋常師範学校・青森小学校等を巡視して、翌日弘前に入り、弘前高等小学校を巡視して同地に投宿。二〇日は弘前の小学校六校連合の運動会に臨席して、秋田県大館に

泊まり、能代、秋田と進んで、二三日には同所で尋常師範学校・尋常中学校の巡視を行って、翌日師範学校・尋常中学校・各小学校生徒大凡三千名による大運動会に臨席している。そこから六郷、湯沢、新庄、酒田、鶴岡、尾花沢と進んで、一〇月三十一日山形に向かう途中、天童高等尋常小学校を訪れ演説をし、山形に着して千歳公園亀松閣に投宿している。翌日尋常師範学校・尋常中学校を巡視、県会議事堂で演説をして、亀松閣で有志の饗応を受けている。一月三日米沢、四日福島と進んで、六日奥羽地方一周の巡視旅行から帰京している^⑤。

この奥羽地方への巡視で注目すべき点は、森が尋常中学校長の人事に深く関与したのではないかと言う事である。『青森県教育史』によると、森が青森県尋常中学校を視察した明治二十一年一〇月一八日、同校は県属関輪正路校長以下教諭が一人もなく、助教諭一人、書記二人、雇教員六人であった。同年一二月二日関輪校長は依頼退職となり、同月二五日県属脇坂照正が校長事務取扱いを命ぜられている。森文部大臣の示唆によるものと憶測されるところ^⑥。中川元の前掲書には、尋常中学校を巡視した翌一〇月一九日の欄に「弘前泊、勧告」と記載されている。この「勧告」とは、或いは関輪校長に辞職勧告をしたのではないだろうか。それが、一二月の依頼退職という形になったと考えられるのである。

おわりに

本稿は、森有礼の長期学事巡視の全体像を明らかにし、その行程を詳細にすることを第一の目的とし、且つ森の言動と周囲の状況の中に、森が意図した事を探る試みをした。ここで更に、森の学事巡視全般にわたる特徴をいくつか取り上げておこう。

まず出発に当たったの見送りは、文部省の次官・会計局長・参事官・

〔図-5〕 森有礼の学事巡視行程図 (V)
奥羽地方 (第2 地方部)

1888年 (明治21) 10月4日～11月6日

森有礼の学事巡視



六五

参考文献：日下部三之介「文部大臣巡視紀事」(『教育報知』第140号 明治21年10月13日号～143号 明治21年11月三日号) 中川元「奥羽方面随記」(『新修森有礼全集』第2卷 文泉堂、1997) 年
 岩手日日新聞：明治21年10月23日号 『青森県教育史』(青森県教育史編纂委員会、1972年) 『創立六十年』(秋田県師範学校、1933年) 山形新報：明治21年11月1日号、11月2日号

書記官・視学官及び学校関係者数名等でさほど多くはない。これは、虚飾を嫌う森の性格を表しているといえよう⁵⁵。また文部大臣時代の随行者は、秘書官・地方部担当視学官・属官数名及び森の家従数名、護衛として警部・巡査数名等総勢十数名である。

森は、大抵の府県に於て尋常師範学校及び尋常中学校を優先して巡視しており、加えて女学校・小学校、或いは監獄・鎮台等その巡視先は広範囲に及んでいる。そして巡視の途次、各地で知事・郡区長・学務委員・戸長・校長・教員等を集めて演説を行っており、長時間に及ぶ大演説もあれば、巡視先の学校に於て一〇分ばかりの諭示もあり、途中停車駅で関係者への訓諭を行う場合等、其の形態は多岐にわたっている。また、知事・校長等に該地の学事状況を報告させている。更に、各地で各学校集合しての大運動会にも臨席している。森は師範学校に兵式体操を導入したが、中学校や小学校でもそれを取り入れ、その成果を公表し集団意識の向上を図るために学校対抗競技の大運動会を奨励した。ここには、学校対抗により愛校心を育て、ひいては国民国家を見据えて愛国心を育成するという森の意図が見えてくるのである。この大運動会には各地で見物人が多数集まっており、教育の場と国民側が一体感を持てる機会となったことであろう。

また、**図1-5**に示すように、目的地に向かう途次、沿道の小学校へ立ち寄り巡視をしながら行程を進めているのが各地で見受けられる。これは、学事巡視を通して全国に教育普及の啓蒙を図ろうとした意志の現れであろう。そして、巡視先各地で宴会の饗応がなされている。森は強行な巡視日程にも拘わらず大抵の招待には応じており、各地有識者との積極的な交流を図ったものと思われる。

森文政期に於ける学事巡視は、それ以前に比べ格段と組織化され、森をトップとして、視学官、更に現場の教員と、ピラミッド型の構想の上

に実施された。明治一四年から一七年にかけての自由民権運動の実態把握を目的としたものとは異なり、各地の実態を調査すると共に、諸学校令並びにそれに関する細則などについて示諭し、国民国家の形成を見据えて教育普及の啓蒙を図ろうとした。その中で、森自らが全国をめぐる歩いての学事巡視は、他の文相時代には類を見ない際だった特徴と言えよう。近代教育制度が確立期へ向かう過程にあつて、地方教育現場に与えた影響は計り知れないものがあるのではなからうか。なお視学官制度は、森没四年後の明治二六年一〇月、文部省官制の改正により視学官を廃して参事官が学事視察を行うこととなった。

本稿は、森有礼の長期学事巡視の全体像を明らかにし、その行程を詳細にすることを第一の目的としたが、宮崎県・広島県内の動きについては殆どわからず、大和地方（奈良県）・秋田県・山形県・鹿児島県についても十分な解明には至っていない。これらは今後更に詳細な調査が必要である。

北は青森から南は沖縄に至までに及んだ森の学事巡視は、当時の交通事情を加味すると、揺るぎない理念、強靱な精神力がなければ決して実行出来なかつたであろう。本稿がその一端を明らかに出来ていれば幸いである。

注

- ① 明治十七年五月～明治二十二年二月
- ② この内、明治一八年一〇月二日～十一月五日の新潟県へは、明訓学校開校式出席と同校維持資本金等に関する諮問、新潟県有志教育会との懇談に付き、本稿での検討から省く。
- ③ 森有礼「著」大久保利謙監修 上沼八郎・犬塚孝明編『新修森有礼全集』一～五巻 別巻一～三（文泉堂、一九九八～二〇〇五年）
- ④ 森有礼「著」大久保利謙編『森有礼全集』一～三巻（宣文堂、一九七二

- 年)
- ⑤ 『文部省第十三年報(明治十八年分)』「本省事務」二頁
- ⑥ 前掲書「全国教育」四三頁
- ⑦ 鈴木博雄「文部省視学官の学事視察に関する一考察―初代文部省視学官中川元の巡視日記を手掛りとして―」六十四頁(『筑波大学教育学系論集』第一号 筑波大学教育学系、一九七七年)
- ⑧ 『文部省第十三年報(明治十八年分)』「全国教育」四三頁
- ⑨ 鈴木博雄 前掲書 六十七頁
- ⑩ 『大日本教育会雑誌』第七卷 第四五号「論説」三頁(『近代日本教育資料叢書 史料篇一』宣文堂、一九六九年)
- ⑪ 『全集』第一卷二二八頁には「四月九日東京出発」とあり、犬塚孝明『森有礼』も同日を出発日としている。しかし、国立公文書館『公文録明治一八年』には、明治一八年四月八日付で「参事院議官文部省御用掛森有礼儀学事巡視ノ為メ・・今八日発程候条此旨上申候也」となっている。更に、読売新聞明治一八年四月一〇日号「一昨日東京を出発せられました」の記事から、拙稿では四月八日を出発日とした。
- ⑫ 国立公文書館所蔵『公文書』「公文別録・文部省・明治一五年〜明治一八年」この電文は「四月十二日神戸発」とあり、船は神戸に着岸、それより大阪入りしたものと考察する。
- ⑬ 『新修』第三卷「書翰一」一八四頁
- ⑭ 「北濱校」「道修校」「愛敬女学校」「愛珠幼稚園」の四校である。
- ⑮ 大阪公文書館所蔵「愛珠幼稚園所蔵文書6」「学乙第一五七号」
- ⑯ 熊本新聞 明治二〇年一月一三日号
- ⑰ 国立公文書館所蔵『公文書』「公文雑纂・明治一九年」
- ⑱ 『全集』第一卷 二二〇頁〜二二二頁
- ⑲ 鎮西日報 明治二〇年一月七日号
- ⑳ 『新修』第二卷「文部大臣学事巡視随日記」六二二頁
- ㉑ 国立公文書館所蔵『公文書』「公文雑纂・明治二一年・第三五卷・文部省、農商務省」
- ㉒ 佐賀新聞 明治二〇年一月七日号
- ㉓ 『新修』第二卷「教育二(演説)」三六一頁
- ㉔ 『文部省第十四年報(明治十九年分)』「明治十九年学事統計表」六七頁
- ㉕ 『文部省十五年報(明治二十年分)』「明治二十年学事統計表」一〇五頁
- ㉖ 国立公文書館所蔵『公文書』「公文雑纂・明治二〇年」
- ㉗ 前掲『大日本教育会雑誌』第五九号・第六一号・第六二号・第六五号
- ㉘ 国立公文書館所蔵『公文書』「公文雑纂・明治二一年・第三五卷・文部省、農商務省」
- ㉙ 巖 平『三高の見果てぬ夢』(思文閣出版、二〇〇八年)二三八頁
- ㉚ 『教育報知』(東京教育社、明治一八年四月〜明治三七年五月)第一二四号・第一二五号・第一二六号・第一二七号・第一二九号・第一三〇号・第一三二号・第一三三号・第一三九号・第一四一号・第一四二号・第一四四号
- ㉛ 前掲書 第一四〇号〜第一四三号
- ㉜ 『新修』第二卷「教育二(演説)」六四九頁
- ㉝ 一月四日、五日、六日については、中川元「奥羽方面随日記」には二月と記載されている。しかし、『教育報知』第一四四号(明治二一年・一〇)に「文部大臣の帰京」嘗て学事巡視として奥羽地方へ出張せられたる文部大臣は、去る六日服部参事官相楽視学官中川秘書官其他と共に恙なく帰京せられたり」とあり、文部省第一六年報(明治二一年分)には中川元に一二月に福島へ出張を命じた記録がなく、一月であると判断する。
- ㉞ 青森県教育史編集委員会『青森県教育史』第一卷 記述篇1 一〇〇三頁(青森県教育委員会、一九七二年)
- ㉟ 『新修』第二卷「文部大臣学事巡視随日記」五九二頁(本学大学院科目等履修生)